

## 夢枕獏『上弦の月を喰べる獅子』論

―〈宮沢賢治〉と排除のシステムからの脱却―

構 大樹

はじめに

宮沢賢治テキストは、学校教育場の下支えをうけて流布している。大島丈志・梅田えりか「賢治作品、教科書では今」(『賢治研究』、二〇〇六・一〇)で指摘されているように、「圧倒的多数の人々は、賢治作品と教科書で出会っている」。ただし、学校教育場において賢治は、理想的な人間として扱われやすいようである。

戦後の小学校国語教科書における伝記教材を調査した茅野政徳は、賢治に関する伝記が長期にわたって掲載される要因について、彼の人生が「そ

れぞれの時代に合う素材を誰よりも持ち合わせ、様々な教育的意義を容易に付与し、その時代に求められる規範的人間像を体現した人物として描き出すことができる」ため、と指摘している<sup>(1)</sup>。茅野の指摘は、少なくとも義務教育段階にある初等教育において、賢治が共同体の維持に寄与する生き方を体現した人物として、要請されていることを覗かせる。学校教育場でのこうした傾向は、今日でもなお批判的に言及される、「雨ニモマケズ」を中心とした「「聖人化」の自閉」問題<sup>(2)</sup>の遠因のひとつと言える。

もちろん、「聖人」としての賢治イメージ(以下、

（宮沢賢治」と表記する）から、抜け出るような受容を見出すことはできる。たとえば「永訣の朝」は、妹の死を乗り越え、みんなの幸福を祈念するという主題のもと、高校国語のいくつかの教科書に掲載されている。ところが、一九九〇年から二〇〇〇年代のサブカルチャーとされる領域においては、主題が脱臼され、「わたくし」と「いもうと」が焦点化されることで、兄妹あるいは男女の関係をめぐる物語のなかに、サンプリング的な引用をなされることがある(3)。規範的な（宮沢賢治）に囚われない受容をあらわす、興味深い事例であろう。このような事例を、受容史という視角から眺めるとき、いかなる系譜が浮かび上がるのか。

秋枝美保は柳美里、長野まゆみにおける賢治受容の検討を通じ、「一九八〇年代の女流作家の作品に、賢治の作品の新たな受容があった」ことを確認する。それは、同時代的な少女たちの心性に倣った、「賢治作品の極めて特異な引用という形をとってなされた」と説いている(4)。秋枝が着目する「極めて特異な引用」とは、柳美里の場合でいうと、周知のような『みんなのため』を志向した実践ではなく、むしろ「現実の向こう側との接点における様々な賢治の身振りに焦点が絞られ」た

引用を指す。先の事例は、「聖人」像から相対的に自由な受容という点において、「一九八〇年代の女流作家」の受容様態と重なり合う。

では果たして、そうした文学テキストでの試みは、当時の女流文学に固有の現象であったのだろうか。

本稿で取り上げる夢枕獏『上弦の月を喰べる獅子』（早川書房、一九八九、以下『上弦の月』と表記する）は、従来、賢治受容史では看過されてきたきらいがある。しかし、〈宮沢賢治〉を再構成して主人公のひとりを造形したこのテキストは、第十回日本SF大賞（一九八九）と第二十一回星雲賞（一九九〇）を受賞した通り、SFというジャンルで高く評価された。また「宮沢賢治の抱えていた情動の新たな受肉」といったように、その再構成の新鮮さに言及する書評(5)や、賢治テキストに類似する「感動」を堪能したという雑誌連載時（『SFマガジン』、一九八六・二―一九八九・六、全二十一回）の読者感想(6)も見受けられる。『上弦の月』には、賢治テキストとの親和性を保持しながら新たな〈宮沢賢治〉を構築すると同時に、その像をSF文学のなかに違和感なく落とし込んでいる可能性が考えられる。この可能性は、柳美

里や長野まゆみが一九八〇年代に行った「賢治の作品の新たな受容」と軌を一にしながらも、ジャンルの差異に由来する別の受容様態をあらわす指標となるはずだ。

そこで本稿では、『上弦の月』における賢治テクストの受容様態と、再構成された〈宮沢賢治〉を跡づける。それらは、いかなる物語から要請されたのか。また中沢弥が言及した、SF文学の「経験としては異質なものの（異化）を現実と接合（認識）していく」という特性（<sup>7</sup>）に従うならば、どのような「現実」を受けたものであったのか。以上の点を明らかにした上で、このテクストを、一九八〇年代に現出した「賢治の作品の新たな受容」の系譜のなかに位置づけることを目指す。

## 一 「宮沢賢治」と〈宮沢賢治〉

まずは『上弦の月』の梗概を、簡単に確認しておきたい。

螺旋に導かれた「宮沢賢治」と三島草平は、それぞれが生きる時間・場所を飛び越え、蘇迷楼という世界で融合しアシュヴィンとなる。彼は自らの「狂おしい思い」のままに、「大地そのものが、

蒼い虚空にむかつてせりあがり、広がっている」かのような山を登り始める。人間が暮らす有楼にたどり着いたアシュヴィンは、聖典『獅子の書』に書かれた予言を知る。その予言とは、有楼の奥に位置する獅子宮の二つの「問」に答えると、世界は「混沌」に呑み込まれ、滅びるというものであった。それでもなお「運命」に従ったアシュヴィンは、ついに獅子宮の「問」を解き、蘇迷楼の頂に到達する。彼は「如来」となり、後にシャカ族の王子として転生することとなった。

テクストの冒頭において「宮沢賢治」は、一九三三年に生きる人物として登場する。彼は病床にありながら、次のような衝動に駆られていた。

ぎちぎちと鳴る、泥で汚れた黒い手が、ほんたうのわたくしの手です。蒲団の中で、つめたくさむしく震へてゐるのは、わたくしの手ではありません。（二三―二四頁）

ここからは「宮沢賢治」が、野外で農作業に似しむ自分こそ「ほんたうのわたくし」だと規定していることが分かる。また引用箇所には続けて、「新しい肥料の設計や、みんなのための花壇を造

るために」「わたくしはこの蒲団から立ちあがらなくはな」らないともある。彼が《みんなのため》の活動を志向し、それをなすことに駆り立てられていることも理解される。ただし、「宮沢賢治」の自己規定からくる具体的な行動は、テキストではほとんど示されていない。彼が「いもうと」への執着から逃れ、「人々のためのほんたうの道を捜す」には「どうすれば、どこへゆけば」よいのかに苦しむ姿が、描かれるばかりである。

こうした傾向は、物語の重心が「いもうと」に起因する「宮沢賢治」の苦悩にあることを指し示している。その一方で、先のような葛藤は、彼がなそうとした実践が不明瞭であるために、テキストの言説のみでは容易に空転する。また、病臥する自分を「ほんたうのわたくし」ではないとする規定も、単なる自己愛の表出とならざるを得ない。しかし、テキストは農民と交流する「宮沢賢治」の姿を控えめに挿んでおり、あたかも彼が《みんなのため》に実践したことを、自明のこととして扱っているかのようなのである。とすると、「わたくしを散り散りにしてゆくやう」な「ほんたうの道」を求める飢餓感、テキストの外に位置する「宮沢賢治」ということば自体が帯びているイメージ

と交通することで、はじめて生々しく浮上するという構図がとられているのであろう。

テキストが織り込んでいるイメージは、まさに〈宮沢賢治〉が喚起するところの実践であると言つてよい。学校教育場が再生産し続けているように〈宮沢賢治〉は、一般的に「雨ニモマケズ」の「アラユルコトヲ／ジブンヲカンジョウニ入レズニ」という言説(8)に依拠しながら、《みんなのため》に羅須地人協会を拠点とした農業指導などに無償で取り組んだ、とされる。たとえば、一九七八年度使用の中学校国語教科書『中学国語1』(日本書籍)には、「理想を掲げ」た人物として読まれた賢治伝記の感想文が掲載されている。そこでは「いつも人々の幸福のために、自分を忘れて働いていた賢治」、「賢治は、生涯を通して一人でも多くの人が、日本人として、人間として、ほんたうの心を見つけてほしかったんだと思う」といった一文を見ることができ(9)。

だが、テキストは既存の〈宮沢賢治〉を引き受けているとはいえ、《みんなのため》に邁進した動機の部分に関しては、「聖人」像と距離をとろうとしている。むしろ、その動機を初めは空白にし、次第に〈宮沢賢治〉から引き離す力をもって、物

語を展開させようとしているとさえ考えられる。テクストがこの空白を、「いもうと」との関係によって埋めようとしていることは言うまでもない。エピソードで引用される「青森挽歌」の一節——「ヘッケル博士！／わたくしがそのありがたい証明の／任にあたってもよろしうございます」は、そのことを強調してやまない。

テクストは別の箇所でも、「ヘッケル博士」に触れている。生物が「螺旋力」によって貫かれていくことを、傍証する学説が紹介される際である。そこではヘッケルの「個体発生は系統発生を繰り返す」という生物発生原則の命題が提示され、生物が「子宮内部で進化を繰り返した後に生まれてくる」ことが語られる。生物の成長を、進化を反復しつつ上昇する力だとすることで、それを「螺旋力」ということばで表現するわけである。引用されたヘッケルの命題に従うと、エピソードはこれから「宮沢賢治」ことアシユヴィンが、蘇迷楼において生物が「来魚」として海から上がり、「極頂へ至るための旅」をしながら「如人」へと進化していくのを、つぶさに目撃することの予告と捉えることができる。

もっとも、「青森挽歌」における「ヘッケル博士」

の箇所は、鈴木健司が述べるように、「賢治にとってヘッケルとはどのような存在としてあるのか。『ありがたい証明』とはどのような証明なのか。

発話者は誰で、受け手は誰か。二重括弧の詩法的意味は。さらに、前後の詩句との接続関係は。これらに関して、諸説があつて未だ定説を見ないというのが現状である」(10)。とは言え、「青森挽歌」の言説に寄り添う論考では、おおむね二重括弧を「わたくし」の心中に潜む「修羅」に通ずる「魔」の声、と解釈する点では共通していると言える。鈴木はこの箇所を、「《魔》が、賢治の誇大化された分身であるヘッケル博士」に向かつて「ヘッケル博士！／わたくしが、妹とし子さんの天界への往生という、ありがたい証明の任にあたってもよろしうございます」と呼びかけた、と読み解いている。鈴木論とは、「わたくし」がヘッケルの学説に反発を覚えていると解釈する点で対立関係にある大塚常樹も、「わたくし」が「妹「トシ」の、死後の行方への執着を禁じえなかった」ばかりに、「心情の弱み、賢治の言葉を借りれば「一寸油断」に、つけこん」できたのが「ヘッケル博士」の箇所の「魔性の声」だ、と指摘している(11)。

テクストが「宮沢賢治」の造形にあたって、へ宮

沢賢治」の部分的な接続を行っていることを鑑みると、エピグラフの機能にも「青森挽歌」における「ヘツケル博士」の位相が織り込まれていることが考えられる。つまり、エピグラフは「宮沢賢治」の「魔」的な「いもうと」への執着が、彼の葛藤の根幹にあることも、先行して強調しているのである。

このように、『上弦の月』は「宮沢賢治」における「いもうと」の存在を、冒頭より強く印象づける。引用される賢治テキストの比重が、詩集『心象スケッチ 春と修羅』（関根書店、一九二四）——なかでも「無声慟哭」「永訣の朝」「松の針」「青森挽歌」といった「いもうと」の死を題材とした詩に傾斜していることから、それは明白である（12）。テキストはやがて、「宮沢賢治」の執着が「いもうと」から臨終の言葉として「無量の慈悲」を贈られたためではなく、彼女へ肉欲を抱いていたことに由来する、と語り始める。それこそが彼の「修羅」であった、と。

「宮沢賢治」は『みんなのため』を志向した実践が、実は『わたくしのため』に「いもうと」への肉欲を忘れるべく行ったことを告白し、謝罪する。そして、そうした欲望を抱く自分もまた「わ

たくし」であることを受け入れる。「宮沢賢治」が獅子宮で訊ねられた「問」とは、「汝は何者であるか？」「朝には四本足、昼には二本足、夕には三本足の生き物がいる。それは、何であるか？」であった。答えは、いずれも「私」である。したがって、『宮沢賢治』と地続きの関係にある「宮沢賢治」が、自分の「修羅」を切り離さず、認めることこそ、テキストにおいては「如来」へと至る、必要不可欠な要素とされたのである。

ただし、それが『宮沢賢治』の俗化を意味することは、ここで確認しておきたい。

## 二 三島草平に吹き込まれたもの

さて、「宮沢賢治」が「如来」となること自体については、『宮沢賢治』からすると、それほど違和感があるものではないのかもしれない。たとえば小倉豊文は、終戦直後に「現在の私の心象にある賢治さんは「ほんとうの法華の行者」であり「本化の菩薩」でありますので、内心には「賢治菩薩」と拝んで居ります」と記したことがある（13）。あるいは桑原啓善は、賢治が『妙法蓮華経』不輕菩薩品第二十で説かれた不輕菩薩の功德を「現代にお

いて実践してみせたことは明らか」とする見方を提示している(14)。しかし『上弦の月』で見落としてならないのは、「宮沢賢治」ただ一人で「如来」になったわけではない、という点である。彼は三島草平とともにアシユヴィンとして、獅子宮の「問」に答えたのだ。「宮沢賢治」に欠け、草平が補ったものとは何であつたのか。

テクストにおける草平は、一九八五年頃に生きていると推定される。彼は胃癌を患つており、余命いくばくもない。しかし、そのことに關しては「卑怯な満足感のようなもの」を抱いている。

「卑怯な満足感」は、「十年以上前」にベトナム戦争で得た体験からくるものである。カメラマンとしてベトナムに赴いた草平は、「三人の白人兵士」が子どもたちを撃とうとする場面に遭遇した。彼は子供たちを前にして、制止しなかつたばかりか、無意識的にカメラを向け、シャッターを押し続けてしまう。しかも偶然、「ゲリラの砲撃」を受けたことで、「白人兵士」たちは死んだ。この体験が、草平に「幸福に生きる」ことへの罪惡感を植え付けたのである。

わたしが、何もしなかつたという事実は動かな

い。／「中略」／わたしは、幸福になつてはいけない人間なのだ。わたしは、自分が不幸であると感じる時だけ、ほんの少し安心する。／それは卑怯な生きかただった。／わたしは、人の幸福のためにこそ生きねばならない人間なのだ。  
〔四五頁〕

ここという「人の幸福のためにこそ生きねばならない」とは、「人の幸福のため」に献身すること自分もいづれ幸福になるのではなく、自分が不幸になることで「人」を相対的に幸福にする、という生き方の表明と捉えることができる。だからこそ、草平は「幸福に生きる資格のない人間」だという感覚を常に再帰させるために、胃癌と、「砲撃」の後遺症とされる「螺旋の幻視」を甘受しているのだ。

草平の生き方は、「宮沢賢治」のそれをなぞるかのようである。後者における《みんなのため》の実践は、「いもうと」がいまわの際まで「菩薩」であつたにもかかわらず、自分は「修羅」であつたことへの贖罪という側面がある。他方で前者の思考も、結果的に生き残つてしまった罪惡感を、自分が不幸であることによって贖うという点で同工

異曲である。草平は「宮沢賢治」を反復していると言つてよい。ただし、両者を重ね合わせると、「宮沢賢治」が「宮沢賢治」に依拠していたのに対して、草平は彼が生きた時代の空気が吹き込まれて、いることが見えてくる。

そもそも、草平がベトナムへ赴いたのは、彼が大学生のときに出会った高村涼子の死が関係している。当時、キャンパス内が全共闘運動に呑み込まれ、社会的にも「ある作家が自衛隊に乗り込み、武士の作法で割腹してのけた」。そうした「みんな熱にうかされていた」ころ、草平は「革命を叫ぶ学生の言葉」に「奇妙な違和感」を覚えていた。彼が関心を示したのは、社会革命ではなく、「神だとか、宇宙だとか、そういうもののことについて考え」ることと、「カメラを持って、野山をうろつくことであつた。

草平にはそれら二つが、密接に結びついていたのであろう。彼は「宇宙から届けられたばかりの光を、野山の中で、レンズで拾ってゆく作業」を通じて、「神」「宇宙」といった超越的存在によつて自分の生が許されていることを、微分化して確かめようとしたと考えられる。なぜなら「おそらくはこのぼくも」周囲と同様に「熱にうかされてい

た」とあるように、表面的にはベクトルの方向が逆に見える、社会革命を掲げた「熱」と草平のような、いわば個人の内面変革を目指す試みは、ともに実存の喪失感を基盤にしているためだ。小熊英二は一九六〇年代末の若者たちを、「近代」から「現代」のはざまにあつて、「自分とは何だ」という、アイデンティティ・クライシスに集団的に見舞われた日本初の世代」と呼んでいる<sup>(15)</sup>。

そうしたなかで、草平は涼子と出会うことになった。そして、涼子から賢治テクストを紹介される。草平はさらに賢治テクストを介して仏典に触れるようになり、「宇宙」についての別の角度からの「表現の仕方」を発見する。草平にとつて涼子は、「自分とは何だ」という不安を、同じベクトルで探求する同行者——しかも新たな指針を示してくれたという点では導師的な位置にあつたと理解される。

しかし、草平は事後的に涼子が「過激派同志の抗争」で死んだことを知り、彼女との相違を見抜けなかった自分を激しく責めることになる。それと同時に、言語化できない対象への「怒り」をも抱くようになる。



不思議な怒りがあった。どこへもやり場のない暗い炎であった。炎の半分はぼく自身に、もう半分は、得体の知れない遠い暗黒の方向に向けられていた。それがどこであるのか、ぼくにはわからなかった。〔三八頁〕

この「得体の知れない遠い暗黒」に向けられた「怒り」は、超越的存在への信頼が揺らいだことに起因するのであろう。よってその後、草平はみずみずしい「宇宙から届けられたばかりの光」を追うことをやめ、死こそが生物に平等にもたらされることを、戦場で確認する行為に転ずるのである。

であるならば、なぜ草平は二人の子どもを見殺しとしたことに、罪悪感を覚えるのか。これは草平がベトナムという地を選択したことと、密接に結びついている。水溜真由美は、同時発生的に巻き起こった当時のベトナム反戦運動、全共闘運動、公害反対運動には「高度産業社会に対する批判が少なからず刻印されている」と説いている(16)。このことは、草平のベトナムを選択するという発想が、涼子の死を通じて抱いた「これまで遠くのできごとだ」とばかり思っていた事件の中に、いきな

り放り込まれたような「感覚に、自覚的か無自覚的かはともかく、従った上でのものだったことを示唆している。

無論、草平の行動とベトナム反戦運動を、そのまま重ねようとすると無理が生じる。第一に、彼は涼子を死に追いやったと思ひ込み間接的な加害者意識を持つことで、自罰的にベトナムへ赴いたのである。ベトナムは当時、小田実が演説したように、特需の恩恵をうける日本に住むがゆえに「ベトナムに対しては加害者の立場に立っている」ことを喚起できた(17)。草平がそこを選択したのは、自分の加害者意識が増幅され得る場であり、なおかつ米ソの冷戦構造がもたらす不条理な死の噴出が予想される場であったためと言える。

だが、蘇迷楼に視点を移すと、「宮沢賢治」の抑圧された肉欲は、野阿梓がアシユヴィンの「『影』的随伴者」(18)に位置づけたダモンが、直截的に妹を犯すことで代行される。このことを考慮に入れるとき、さらにダモンが有楼の住人と敵対する原人を引き連れ「有楼を手に入れる」と宣言したことは、草平の深層心理を押さえる上で重要となる。つまり、彼にも対社会的な革命の「熱」が、涼子の死によって芽生えていたと考えられる。草平は

涼子の死が「ぼくを変えた」と述べる通り、生物が生ではなく死を存在意義として与えられている感覚に転じたばかりでなく、自分の手で外部を変えられるという革命志向を、ベトナムへ赴いた際に有していた。日本に戻った草平が、終わることのない罪の証しⅡ「螺旋」の蒐集にのめり込むのは、ベトナムで後者すら失われてしまったためである。

『上弦の月』における草平は、一九六〇年代末の空気に翻弄され、一九八五年頃に至るまで、それになお束縛されているという点で、テクストにあらわれる物語の同時代性を担保している。他方、彼はあくまで「宮沢賢治」を補助するという位相にある。これは、彼らが全くの他人ではなく、草平の方は賢治テクストを通じて「宮沢賢治」を知っていたことより明らかである。草平は彼を「常に、人のために自分を生きた人」と認め、その上で賢治テクストに「酔っ」た。この関係性の偏りは、草平が「宮沢賢治」の理解者であり、テクストにおいてはやがて「宮沢賢治」の補助者となることを示している。草平が蘇迷楼から現実世界に生きて戻ってこられなかったことは、そうした彼の役割を際立たせる。「宮沢賢治」が、年譜通りに

没したこととは対照的である。補助者としての役割が彼にあつたからこそ、「宮沢賢治」を「如来」へと押し上げることでそれが果たされた結果、死をもつて退場させられたのであろう。

テクストで草平は、「宮沢賢治」に欠けた同時代性を、葛藤の反復とそこからの脱却の補助によって活性化させることで、時代の隔たりを無化する。それでは、テクストにあらわれる物語は、同時代性を担保しながら「宮沢賢治」を再構成すること、何を語ろうとしているのであろうか。

### 三 有楼における排除のシステム

『上弦の月』では物語を「現実面接合」するために、三島草平という存在の導入が、方策のひとつとして取られている。そして、その接ぎ木された「現実」を異化する「異質なものの」に該当するのは、有楼であり、アシュヴィンの蘇迷楼での「旅」そのものである。

アシュヴィンは「私は誰なのか」という問いを抱いたまま、蘇迷楼の上を目指し続けた。「私自身を捜す旅」をしたのである。しかも、アシュヴィンには「果てしのない登攀」が、生きることの意

味として感じられた。ただし、これは彼が、生の充足を一時的には得られていながらも、実存を支える「私」が希薄という不安定な状態にあったことを意味する。

この状態が、ときにアシュヴィンを立ち止まらせ、「上にゆこうとする意志」をかき消そうとすることは言うまでもない。実存の希薄化が進むと、「私は誰なのか」という問いすらも霞み、途端に「もう、登らずに、ここで暮らし、ここで歳老い」たい欲求が生じるためである。アシュヴィンは「上にゆくことが、その答に出会うことなのだ」という直感的な期待を持って「旅」した。しかし、それは薄氷を踏むかのような「旅」であったのだ。ところが、傷つきながらも有楼にたどり着いたアシュヴィンを待っていたのは、「私は誰なのか」に対する答えと存在の意味を阻害するシステムであった。

「如人」は有楼の門をくぐると、まず「真人」であることを証明することが求められる。これは、自らに生殖能力が備わっていることで証明される。次に「真人」として認められると、手に「人面獸身の獅子」が「獣の手で口をおおっている入れ墨を彫られる。この儀式を経て有楼の住人となっ

た「如人」は、さらに厳しい階級制度のなかでの生活を余儀なくされる。階級は、「真人」としての「血筋の古さによつて」のみ決定される。

このようなシステムは、獅子宮の「問」に答えられる存在を、有楼に入れないために設けられていると考えられる。生殖能力の有無は、「如人」がそれ以上の進化をするか否かを測定するために行われる。また入れ墨は、獅子宮の「問」に答えないことの誓いを、視覚化してあらわしている。それと同時に、「人と会う時には、片手をあげて、掌の入れ墨が相手に見えるように」するという決まりのなかで必要とされている。有楼の住人が相互に、「如人」でないことを監視するために用いられるのである。そして、階級制度の基盤にある「血筋の古さ」は、血縁の広がりと言い換えることができる。つまり、誓いの固さを血縁者の人数によつて保証し、それが階級にフィードバックされる制度なのである。有楼では徹底的に、「如来」の可能性を排除するシステムが構築されている。アシュヴィンは有楼に入った後、喉を潰される。これも、システムに準拠した処理として理解される。

とは言え、排除のシステムは、獅子宮への「怖れ」の裏返しと言える。『獅子の書』には「如来が、

問と答と同じであるというふたつの間に答える  
と、蘇迷楼は存在しなくなる」と書かれてあると  
いう。有楼の住人は、血筋が古いほど、一族の歴  
史と血縁者の広がり、その維持に邁進するのであ  
ろう。だからこそ、『獅子の書』の記述を「信じて  
いる」と断言できるのだ。もともと、有楼の住人  
は、社会の継続性を保つシステムの他に、『獅子の  
書』を恣意的に読み換え、獅子宮のいわば征服を  
も試みている。『獅子の書』に「如来が」とあるこ  
とから、「如来」でない「真人」が先んじて「問」  
に答えることで、蘇鉄楼の崩壊を食い止めようと  
いうのである。また「問」に挑戦する最上位階級  
の螺旋師は、「如来」が「運命」によって答えよう  
とするのに対して、「智」によってその問に答えよう  
とする。これらの論理は、いずれも『獅子の書』  
に書かれていない、ということと正当性が保たれ  
ている。ゆえに、システムの維持と「問」への挑  
戦は矛盾することなく、「怖れ」の反発力を用いた  
一対のシステムとして、有楼の秩序形成に寄与し  
ていると判断できる。

アシュヴィンはこのシステムの堅牢さを、喉を  
潰されたことだけでなく、螺旋師の長老ウルガと

の対話において、有楼の滅びの可能性の否定が決  
定的にすれ違うことを通じて、身をもつて味わ  
った。

「何故かね、何故、人を殺してはいけな  
かね」／唐突な質問であつた。／「答えられるか  
ね」／アシュヴィンは口ごもつた。／「答えら  
れない、それが正しいのだ。人を殺してはいけ  
ない——それで、我々はうまくやってきたし、  
それで、うまくやってゆくことができるのだ。  
如来がこの蘇迷楼を滅ぼす——理由はわからな  
いが、それを信ずることによって、我々はうま  
くやってきた。これからも、うまくやってゆき  
たい……」〔四五〇頁〕

ウルガが言わんとしているのは、秩序に抵触す  
る行為は回避されねばならない。なぜなら『獅子  
の書』は、有楼ができた当初より存在した。有楼  
の始まりから現在まで、『獅子の書』に従うこと  
で秩序はうまく保たれてきた。よって、その歴史の  
重み以上のものが他にないため、『獅子の書』は信  
頼に足るのだ、ということである。有楼の代表者  
として語るウルガは、立場の表明を超え、アシュ

ヴィンに向かつて有楼の歴史そのものに挑戦する覚悟を問うている。ではなぜそれにも拘わらず、アシュヴィンはウルガに、獅子宮へ行くことを許されたのであろうか。

ウルガが許可を出したのは、有楼を去った螺旋師アルハマードの遺児たちが争い、あぐく殺し合った出来事の後である。争いの過程で、もとはアシュヴィンの「一部」であったカルマも致命傷を負う。アシュヴィンは、カルマを獅子宮の内部にある「混沌」に溶け込ませることで擬似的な延命を図るため、一心に「ゆかせてくれ」と請うた。こうした悲劇は、ウルガに、有楼における排除のシステムの限界を垣間見せたのではないか。

かつて「天才」とされたアルハマードは、「智」によって一つ目の問いに答えた。しかし二つ目を解くことはできず、絶望した。この絶望にも、有楼のシステムの影響が看取される。螺旋師には「生涯に一度だけ、獅子宮の扉をくぐる事が」できる、という制約がある。この制約も、「怖れ」から生じた「智」による「問」への挑戦というシステムに、決して「運命」を介在させないようにするためのものと言える。「智」が「問」に対して有効でないと実感されることで、再びの挑戦を「運命」

で臨むことを防ぐ目的があるのだろう。だが、この制約は、絶望をより色濃いものにする。「智」で解くという前提と回数制限が意味するのは、「如人」「真人」を問わずあらゆる生物が有した「問」へ挑戦する「権利」を、たった一回で達成せよという脅迫である。蘇迷楼の生物には、「問」への挑戦が生の存在意義として、直感的に備わっている。したがって挑戦が、もはや二度と行えないものとして制度化されると、その失敗はたちまち実存の喪失感を招く。このことがより顕著な形で表面化したのが、アルハマードの有楼からの脱走と言える。ウルガは、アルハマードに同情している。つまり、ウルガはアルハマードに、システムが螺旋師へ不可避的にもたらす絶望の極大化されたあり方が降りかかったことを、認識しているのである。

これに加えて、システムによって排除されたアルハマードの、移住した先でもうけた子ども——ダモンとシェラが、有楼に住むことに強く惹かれるもシステムに阻まれ、逆に有楼の打倒を目指して凄惨な事件を引き起こしたことは、ウルガにその限界を明瞭なものとしたであろう。さらに、それはダモンが原人をまとめ上げ、組織的に攻撃し始めたことで、まさに差し迫った危機となってい

た。有楼を維持するために、その内部に向かつて種々の制約を課したシステムは、反転して外側に敵対者を生み出す装置となる可能性を帯びていたことが、白日の下に曝されたと言える。ここにおいて、システムは限界を露呈し、有楼はいずれにせよ滅びの予兆が現前化した状態となった。したがってウルガには、アシュヴィンが仮に「如来」であつたとして、彼が「問」に答えることで有楼が滅びるか否かの問題が、システムに依存したかゆえの滅びの予兆と等しい問題となつたために、「ゆかせてくれ」という真摯な願いに許可を与えたと考えられる。

有楼における排除のシステムは、「現実」を異化するものと捉えることができる。『上弦の月』において、硬直化したシステムを有する有楼の状態は、ちょうど現在の草平が生きる時間にあたる、一九七〇年代後半から一九八〇年代前半にかけて成立した、高度資本主義社会の日本との相同性を見出すことができるためである。大澤真幸はこの時期を、社会によって「情報化され記号化された疑似現実（虚構）」を構成し、差異化し、豊穡化し、さらに維持することへと、人々の行為が方向付けられているような段階」と指摘している(19)。村上春

樹『ダンス・ダンス・ダンス』（講談社、一九八八）は、高度資本主義社会の論理を「網」に喩えることで、一九八三年頃の閉塞感についてこう描いている。「一九六九年にはまだ世界は単純だった」、「ある場合には人は自己表明を果たすことができた」。しかし、現在は「隅から隅まで網が張られている。網の外にはまた別の網がある。どこにも行けない」(20)。

こうした構図のなかでアシュヴィンの「旅」は、「私は誰なのか」という問いを抱きながら、結果的に「如来」に至るといふ点から、個人の内面変革を追い続けるものであつたと言える。そして揺れ動きながら一貫して「運命」に従つたアシュヴィンの姿は、システムの限界を前にして、漸く上位の立場の者から受け入れられる。もはやそれでも構わない、と。「運命」の「旅」は、有楼のシステムの限界によって異化された一九八〇年代の社会状況を前にして、個人が進むべきあり方のひとつを提示し、その姿勢が真摯なものであるならば、いずれ認められることを語っているのである。

## おわりに

『上限の月』で描かれたアシュヴィンの「旅」は、一九八〇年代における個人の内面変革のための道標としての意味を帯びている。その点において、個人主義的観点から実存を回復させようとするものである。「旅」を終えた「宮沢賢治」と草平の対話は、そのことを象徴している。

「ひとつ、聴いてもかまいませんか？」／声が言った。／「はい」／賢治は、顔をあげた。／おずおずと、迷い、口ごもり、そして、ようやく、その声は訊いた。／「人は……」／「人は？」／「人は、幸福になれるのですか？」／「中略」／答は賢治にはわかっていた。／はつきりとわかっていた。／「なれますとも」／賢治は答えた。／「なれますとも！」（五四四—五四五頁）

ここで着目すべきは、人は「幸福」である、ではなく「なれる」という言い回しで語られていることである。テキストにおいて、実存の喪失感はい前提となっている。その上で「なれる」とするこ

とで、自らが忌避したいはずの「修羅」を引き受けた形での、個人の内面変革の必要性を説いているのである。ただしこの方向性は、当時、特異なものであったとは言いがたい。たとえば島蘭進は、一九七〇年代を起点とする大衆運動としての「新霊性運動」が、「自己変容」「意識と文明の進化」「科学と宗教の合致」「個々人の自由な自己実現による精神運動」というような共通の観念要素をもつて現出した、と指摘している（21）。このことは、全共闘運動以降に実存の喪失感に苦しんだ人々の一部が、個人の内面変革によつて実存に意味を与えようとしたことを物語っている。

しかし『上限の月』は、個人主義的な内面変革への道筋をたどりながら、その一方で個人と社会との接続を試みていたことを読み取ることができている。これは、「宮沢賢治」の存在によつて成立している。彼は（「宮沢賢治」と交通している。よつて「宮沢賢治」がなしたとされる≪みんなのため≫の社会実践も、テキストに招き入れられていることになる。テキストで語られた個人の内面変革には、社会実践を内包していると考えられる。では、なぜ（「宮沢賢治」）に再構成の必要があったのか。

一九八〇年代の閉塞感には、それから逃れよう

とする身振りを契機とすることで、個人主義を特権化する志向が孕んでいた。当時ひろく読まれた浅田彰『逃走論』（筑摩書房、一九八四）では、「過去のすべてを積分Ⅱ統合化して背負いこみ、それにしがみつ」く「パラノ社会」は「活発な成長運動の中で競争過程がどんどん進行して行く」。そうした社会は「動的に安定」しているが、もはや「成長が続いていく可能性は狭まりつつある」とした。よって「次々に新たな差異を作り出しては軽やかに散乱させる」能力をもつて「そこから少しズレた方向に迷走してみる」ことへのポジティブな可能性が見出されていた<sup>(22)</sup>。「宮沢賢治」は、特に学校教育場を介してイデオロギーの維持に貢献している。その意味では、「パラノ社会」とも称された高度資本主義社会を、円滑に作動させるために要請されるのである。

しかし『上弦の月』は、そうした「宮沢賢治」にも現在の有用性を主張しようとしたのではない。ここにおいて、「宮沢賢治」は俗化の必要性が立ち現れたと考えられる。等身大の「宮沢賢治」を構成するために、肉欲の問題が採用された。テクストで積極的に引用された『春と修羅』には、「わたくし」の性欲に関するテーマも見られる<sup>(23)</sup>。恐

らく、それを担保に「いもうと」と接続することで、純化された《みんなのため》の実践を、《わたくしのため》という個人的な問題の位相に下ろす処置がなされたのである。

『上弦の月』は「宮沢賢治」の価値を、一九八〇年代で活性化させるため、従来は中心的な問題とされ辛かった部分に光をあてている。一見すると、「宮沢賢治」を継承しているため、相対的に自由な受容に当てはまるのかどうか、慎重にならざるを得ない。しかし、「宮沢賢治」を再構成し「宮沢賢治」を造形するために、規範から逸脱する部分をあえて組み込んだことは、重視すべきである。したがって、その再構成の仕方から、それが一九八〇年代に訪れた高度資本主義社会の閉塞感を受けてのものであった点も含めて、『上弦の月』は「賢治の作品の新たな受容」の系譜に位置するのである。

## 注

- (1) 「戦後小学校国語検定教科書における宮沢賢治の伝記教材の変遷」(『国語科教育』、二〇一四・三)
- (2) 栗原敦「聖人化の問題」(天沢退二郎・金子務・鈴



- 木貞実編『宮澤賢治イーハトヴ学事典』所収、弘文堂、二〇一〇・一二)
- (3) 拙論「『永訣の朝』とサブカルチャー——高校国語がひらいた〈宮沢賢治〉をめぐる——」(『横浜国大国語教育研究』、二〇一四・一一)を参照。
- (4) 「宮沢賢治と現代文学 その1 (少女文学の系譜)——柳美里の文学に引用された宮沢賢治文学——」(『福山大学人間文化学部紀要』、二〇〇五・三)
- (5) 牧眞司「SF」(『週刊読書人』、「エンターテイメント」時評欄、一九八九・一〇・二三)
- (6) 「TELEPORT」欄(『SFマガジン』、一九八九・七)
- (7) 「昭和文学とSF」(『昭和文学研究』、二〇一二・九)
- (8) 引用は『【新】校本宮澤賢治全集』第十三卷(筑摩書房、一九九七)に拠った。
- (9) この教材は、生徒の「読書感想文」として掲げられている点において、いわゆる伝記教材とは言えない。しかし、伝記を通じて「よき感想文」を書くための模範例としてあることから、〈宮沢賢治〉からどのような感想を持つのがよいとされたのかを窺うことができる。
- (10) 『宮沢賢治という現象——読みと受容への試論』(荻
- 丘書林、二〇〇二)
- (11) 『宮沢賢治 心象の宇宙論』(朝文社、一九九三)。
- ここでいう「わたくし」が抵抗感を持ったヘッケルの学説は、生物発生原則の命題とは別の「靈魂死滅説」を指す。
- (12) 『心象スケッチ 春と修羅』からは他に、「序」「春と修羅」「小岩井農場」が引用された。また『上弦の月』には、「〔絶筆〕」「眼にて云ふ」「銀河鉄道の夜」「農民芸術概論綱要」からの引用も見受けられる。
- (13) 「賢治菩薩如是我聞錄(一)」(『農民芸術』、一九四六・五)
- (14) 『宮沢賢治の霊の世界』(土曜美術社、一九九二)
- (15) 『1968』上巻(新曜社、二〇〇九)
- (16) 「石牟礼道子と水俣」(北田暁大・野上元・水溜真由美編『カルチュラル・ポリティクス1960/1970』所収、せりか書房、二〇〇五)
- (17) 「平和への具体的提言」(『ベトナムに平和を!』市民連合編『資料・『ベ平連』運動』所収、河出書房新社、一九七四)
- (18) 「上弦の月」とかけて「それを喰べる獅子」と解く(『上弦の月を喰べる獅子』下、早川書房「ハヤカワ文庫JA」、一九九五)

(19) 『増補 虚構の時代の果て』（筑摩書房「ちくま学芸文庫」、二〇〇九）

(20) 引用は『村上春樹全作品 1979 ～ 1989 ⑦』（講談社、一九九一）に拠った。

(21) 『精神世界のゆくえ——現代世界と新靈性運動』（東京堂出版、一九九六）

(22) 引用はちくま文庫版（筑摩書房、一九八六）に拠った。

(23) 注11を参照。なお大塚は、『春と修羅』においては「春と修羅」「小岩井農場」「青森挽歌」で、賢治における「《性》の問題」を指摘している。興味深いことに、これらは『上弦の月』でも引用されている。

※

『上弦の月を喰べる獅子』の引用は単行本版（早川書房、一九八九）に拠った。引用に際して、適宜ルビ等を省略している。また引用文中の／は改行を、「」内の文字は論者による注記をあらわすために用いている。

※

本稿は日本学術振興会科学研究費助成事業（特別研究員奨励費）の研究成果によって成立している。